

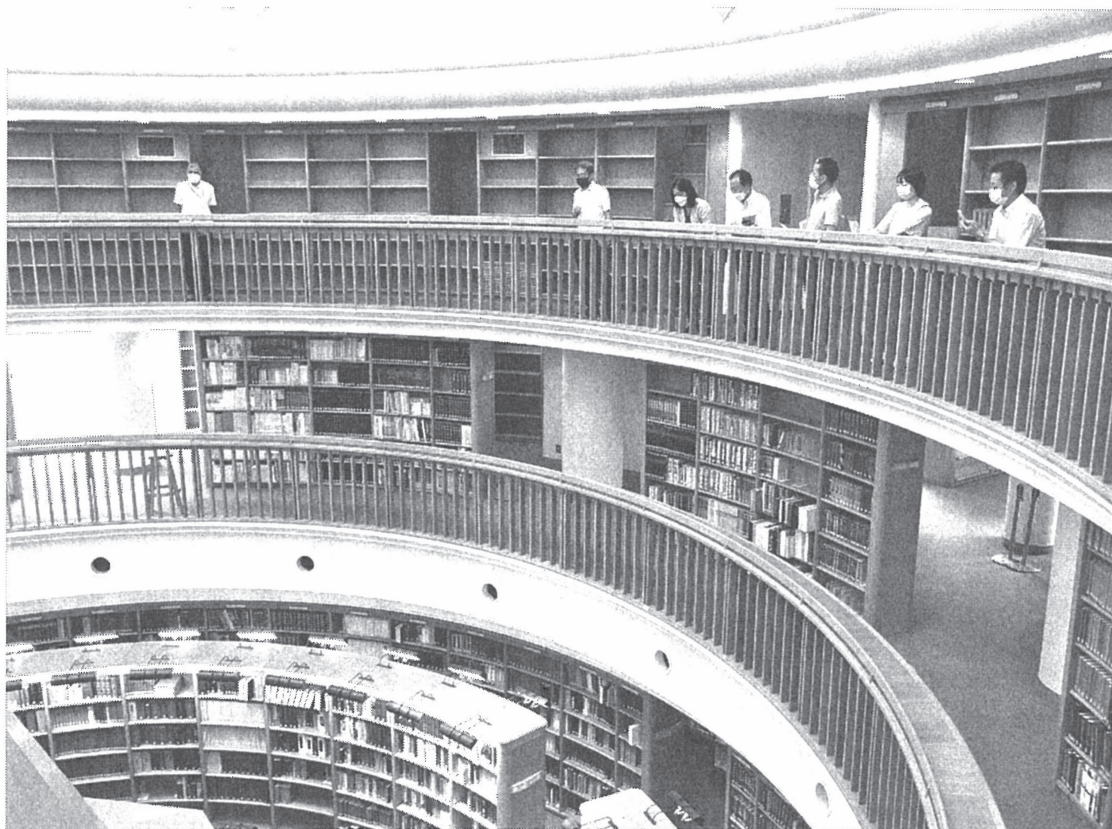
超えるのではなく辿る、二つの文化

納得の文系に説得の理系

安藤妙子＋後藤彩子＋村田純＋宮野公樹

例えば、数多くある学問の分類方法^①について考えるなら、ある人は「対象」で、ある人は「目的」で、そしてまたある人は「手法」で区分し、まるで分類されるべきものが目前に確固としてあるかのごとくだ。なるほど、西洋の学問的伝統において（も）学問分類は血湧き肉躍る熱きテーマであったが、冷静な眼をもつてしてその分類結果のチャート図を眺めるなら、「で？」の一字が頭に浮かぶだろう（図1参照）。何ゆえの分類なのか、と。

知の体系化が大事と人はいう。それはそのとおり。しかし、「ラベル付け」に伴う知の固定化という弊害は決して無視できず、我々研究者は、在りもしない透明な壁で仕切られた小さな部屋に押し込まれ、まっとうな研究者ほど、そこで四苦八苦するはめになっているではないか。結局のところ、学術や大学の制度的側面（素直に考えれば図書分類に有効。他、研究費、財政的管理や教育プログラム制度に関するもの）における意味が大きく、学



日文研に訪れた理系・文系の研究者を出迎えたのは図書館の円形閲覧室 宮野公樹提供

問においてそれはあまり意味をなしていないし、なしてはいけない。

分類や区分が、あくまでその時々のスナップショットであり、かつ便宜上のものでしかないのだと身体的に認識すべく、本企画ではまずその小部屋から出てみることに挑戦しているが、今回は(第二回「解く理系に問う文系」アステイオン九七号^②)、いわゆる文系がいわゆる理系の研究室を訪問した。今回は、その逆。理系が文系を訪れその小部屋の存在を暴きにかかる。もちろん、それは自分自身の小部屋をも、だ。

*

公知化の時間軸

「ゆく河のながれは絶えずして、しかもゝとの水にあらず」。この書き出しで余りに有名な鴨長明の『方丈記』、実はかの夏目漱石や南方熊楠などによる英語翻訳の他、イタリア語など様々な言語へ翻訳されているらしい。インド出身で国際日本文化研究センター(日文研)研究員

(当時)のプラダン・ゴウランガ・チャラン(以下ゴウランガ)は来日前、デリー大学学部生時代に出会った日本の文学を比較研究している。

キーワードは「日本古典文学の海外流通」、「日欧文化交流」。中でも鴨長明の『方丈記』を対象に、様々な言語の翻訳版を比較検証することで、「日本」という地政学的コンテキスト、また中世日本という時代性を超越した、『方丈記』に通底する「現代人にも響く価値観やものの考え方」を掘り出すことを目指している。著者の手を離れて文学作品が世界に流通し、様々な解釈・注釈が付され、人類の「公知」となった結果、今度は反対に作品の側から現代社会のあり方に対してどのような示唆を与え得るか、ゴウランガは紐解こうとしている。

そもそも文学作品を翻訳する場合、いわゆる正確性は当然意識され、何らかの方法で担保されているものだと勝手に思っていた。しかし、ゴウランガの話を聞いていくうちに、翻訳はもつと自由な二次創作だと思えてきた。むしろ翻訳こそ、読み手(＝翻訳者)の理解度を測る良い指標であろう。『方丈記』の翻訳による「公知化」は、

音楽でいうリミックスアルバムの制作と似ているのかも。ただ同時に、後世に何度も咀嚼され、時代を超えて多くの人の腑に落ちていく文学作品と、そうでない文学作品の違いが明らかになるにはそれなりに世紀単位の時間が必要で、作者と同時代の人間は到底評価できないところかもしれない、とも思った。だからこそ世の中に存在する全ての著作物が、ひとつひとつの「公知化」の過程を未来の研究者が追跡するための重要な基礎資料なのだ。その意味で、日文研の書庫で見た膨大な数の蔵書は伊達ではないどころか、きつと全く足りないであろう。

他の研究者が研究対象とどのような姿勢で向き合っているのか、物の考え方やモチベーションについて、私はいつも気になる。少し脇に逸れるが、私自身の研究テーマを本企画の参加者に説明した際に、重要な指摘があった。「未知だからやる(分からないからやる)」という表現を私は多用していたらしい。既に分かったこととされる事柄・学説のうち、自分自身で考え直し、想像した範囲で覆らない事柄・学説は、私には主たる興味の対象にはならない。「もしかしたら定説は間違っていて、私の仮

説のほうが、より真実を説明できるかも」と思いついたとき、あるいは誰も言及したことがない現象や、記述したことがない分子や遺伝子の機能が見えそうなき、なぜ自分は興味が湧くのかを説明するために「未知だから面白そう」との決まり文句を使うことになる。とは言え具体的に何がどう面白そうなのかは、論文やプレゼン、研究費の申請書においては別途説明されていなくてはならない。実は、互いに研究領域が極めて近い研究者にとつては何が未知で何が既知かは自明なので、議論の余地が少ない。そう考えると、「未知だから」は、やや領域が遠い研究者向けに、具体的な説明だけでは何がどう面白くて新しいかが伝わらない場合に備えて多用される決まり文句なのだ。その文句には、定説と異説・新説の境界線をぎつくり知ってもらふ意図がある、とも言える。「未知だから」は自動的に凄いでしょ、面白そうでしょ、と言うわけでは決していない。ただそうやって、やや領域が遠い研究者にわかってもらふつもりで安易に使う言葉の意味・作法自体が、文系研究者には伝わらなかったのだ。ということとは、文系研究者は私が当初想定していたより

もさらに遠い人達なのか？　しかし、どういう表現がより適しているのかは簡単には見つかりそうになく、自問は続く。

では、ゴウランガの研究に対する姿勢はどうだろう。私と同じく、どうせお金と時間を使って研究するなら新しいことをやる、のはずだ。このようなことを色々考えているうちに、後日ゴウランガから以下のコメントを貰い、多くの気付きを得た私はすっかりゴウランガのファンになってしまった。

「作品の理解は常に時代思潮に縛られているため、研究者がどのようにそうした縛りから抜けて、別の方法（人類のためになる）で作品を理解できるのかを探すことが課題で、そこでは作品と向き合う姿勢が大事である。例えば、「方丈記」で鴨長明は社会的階層と関わる問題、災害に対する向き合い方、あるいは権力に対する批判的な思考などについて言及しているが、そのように理解するためにまずテキストをどう読むか、研究者の主體的な立場が必要である。

単に字面を追うだけでは、普通に無常観の文学として読まれてしまいかねない」。

研究者の主体的な意識（興味、考え方）がないと研究は成り立たない、これは自然科学でも全く同じで、完全に同意できる。色々な視点から研究対象を観察し記述する、これも同じだ。そしてそのような、自らの主体的な意識にどんな潜在的バイアスがかかり得るかの意識が必要な点も一緒だと感じた。しかし、「研究対象のことを理解しました」、と表明するまでに要する時間軸とスケール感が人文系と自然科学系で決定的に異なる可能性に気付いた。

人文系では、研究対象の本質を浮かび上がらせるまでにかんがりの時間をかけ、全体像を論ずることができるようになった時点でようやく、「理解した」と言うのだろう。あるいは逆に、簡単に「理解していない」あるいは「未知」と言うな、という姿勢でもある。さらに人文系では、研究対象の文章の解釈を一人で何通りも連ねることができ。従ってそれらを咀嚼するうちに、例えばゴウランガ

自身も文学作品から多くの気付きを得て、考え方が影響されることもある。研究者と研究対象とが互いに共鳴し、影響しあう様子を想像すると、文学作品を研究することは、何やらとても崇高な作業に思えてきた。一方、自然科学系はかなり気配が違っていると私は思う。設定した厳密な前提条件の範囲内で精度高く説明できる知見が得られた段階で、小刻みに「未知だったことを理解した」、を繰り返す。さらに、自然科学では研究者は観察者たるべきで、研究対象に無用な影響を与えてはいけなしいし、ましてや共鳴などしてはいけない。たとえ研究対象をリスペクトしていても、百歩譲って、共鳴していないフリだけは必要だ。また重要なことだが、一部の学問領域を除いて、自然科学では原著論文、はまずない。研究スキルや装置が高度に専門化した結果、一人で論文を書くことはかなり例外となった（いや、コラボは楽しいし、一人で書く必要性は私には感じられない）。

以上、色々な観点から考えて、ゴウランガは只ならぬチャレンジャーだ。極東のマイナーな外国人ソロアーティスト、鴨長明による『方丈記』のテキストに人類に普

遍的な価値を見出して、たった一人で『方丈記』の世界メジャーデビューを目論むとは！

私だったら人文系の研究テーマにどう取り組むか、少し乱暴に考えてみた。「自分で読むことができない諸言語に翻訳された、ある文学作品(方丈記)を世界の多くの人たちと輪読する。一人で考え付くこと、できることには限界がある。いくつかの言語でそれぞれ複数バージョンに試読し、当該言語の話者によるテキストの読み込み方がどう影響を受けるか調べ、元の日本語をどう翻訳したら「普遍的」な読まれ方をされるチャンスが高まるかを明らかにする」。少なくとも人為的なインプット(試訳)と、それに対するアウトプット(読み手の理解)の相関は調べられそう。いやむしろ文学作品ではなく、もっと思い切って聖書、仏典、コーランなど世界中のありとあらゆる教典を対象にしたらどうだろう。一般的な文学作品に比べて翻訳版の数、歴史の長さなどの点からテキストマイニングの対象として有利なはずだ。全宗教が説く尊い智慧の最大公約数、つまり全人類に共通の価値が存在するかどうか検証することは最低でもできそう

だ。時代を超え受け継がれてきた、有難いメッセージに触れてどれだけ胸熱になったとしても、冷静な観察者を装って実験してみたい。部外者による検証を基に教典を編纂し直すなど宗教者が許すはずもないから、宗教の「公知化」は、実は全く手つかずではないだろうか？ 教典の Wikipedia も、調べた限りなさそう。俗物な私にはもちろん分不相応だし、宗教への冒瀆とお叱りを受けることもあろう。

けれども教典に書かれていることは、「幸せ」な社会の実現を目的とした単なる手段で、表現の一つだと考えた。伝統宗教の教典が書かれた時代と我々が生きる二一世紀とでは、幸せの定義そのもの、また幸せの実現のための手段が大きく違っていて不思議ではない。歴史的に、そして将来にわたって人生の目的も自己実現の手段も変容しうる中、教典のテキストの普遍性、不変性、可塑性と、読み手の価値観や願いととの相関を調べることは、他でもない今を生きる私たちの「幸せ」を実現するために必要な検証作業ではないだろうか。こんなことは、この企画に参加するまでは考えたこともなかった。

公益財団法人サントリー生命科学財団主席研究員)

(村田純・

*

答えは一つ、か？

櫻井悟史の所属する滋賀県立大学は国宝彦根城から車で僅か一〇分の距離の、琵琶湖沿いにキャンパスを構えている。敷地内には堀を思い起こす水路が巡り、回廊を窺わせる廊下があり、歴史を感じさせる構造が垣間見えた。滋賀県立大学は日本の大学で唯一、公共建築百選に指定されている。個人的には自転車置き場までもが蔵に似せた壁と屋根のデザインとなっており、ここまでこだわることという印象を受けた。

さて、そのような佇まいの滋賀県立大学において、櫻井は人間文化学部に所属しており専門は社会学だという。私は大学生活も長くなるが、実は社会学と聞いたときに最初に思ったのは「何を学問するところだろう」であつた。本企画に参加している他の文系二名、ゴウラン

ガの文学、三谷宗一郎の政治学はすぐに理解できる。しかしながら社会学は漠然としすぎていて全くイメージがつかめない(本音すぎて申し訳ない)。そんな状態で、櫻井の研究紹介を聞くこととなったわけだが、日本社会が国内の死刑制度をどのように制度化し、刑罰の中でどう位置付けてきたかを顧みる——正直いつて私には重すぎると感じるそういった研究をメインテーマとしつつ、あたかもそれとバランスを取るかのようには、キャバレー、宝塚、遅刻、ジェンダー、マンガ、フェス、映画、伝統産業、二・五次元、古本屋、クラウドツーリズムなど、比較的軽妙で多種多様な社会風俗をトピックにした研究を並行して進めているのだった。

「え……、なにこのバラバラ感」

キャバレー以外はゼミ学生の研究テーマとのことだが、驚きとともに疑問しか浮かばない。学生が興味を持った事柄や関心事を研究テーマに設定するため、当事者の身近な話題が取りあげられやすく、その分自分が取り組む課題の解決に向けて力も入れやすいことは理解できる。書籍・雑誌で調べたり、アンケート調査を行ったり、

思考実験を行ったり様々あると思うが、これだけテーマがバラバラでは各個人への適切な指導が可能であるのかと、また身近なテーマを大学で学んだ学問の集大成としての卒業論文のレベルまで引き上げるのは大変ではないのかと率直に感じたのである。

多くの理系がそうだと思うが、毎年新しく研究室に入ってくる四年生が卒論として一年間担当する研究テーマを決めるとき、その学生が大学院に進学するか視野に入れ研究テーマがこの先どの程度でまとまりがつきそうか、あるいは、パラメーターのみを変えた(例えば、実験プロセスは同じだが、用いる材料の種類をAさんにはSiを、BさんにはSiO₂を与えるといったように)研究テーマを複数人に任せて最後に比較しまとめるのはどうか等考える。そうして様々な要素を考慮して研究室全体で一つの頂上を目指して登山するようなイメージをもちつつ各研究テーマを設計する。このようにするのは、これから該当分野の研究に従事する前段階にある学生が、研究テーマを設定するのはほぼ無理だからである。専門知識が不十分ゆえ、何が自明で何が未知か、何かを明らかに

にするために現時点でどのような実験手法や観察方法があるのかを知っておかないと「問い」が設定できないのだ。なぜこの研究が必要かという視点を持ち、過去の類似の研究を知った上でまだ明らかになっていないことを自分で探していくには時間が必要で、そのため私を含む多くの理系教員は学生の卒業論文のテーマを自分が指導できる範囲から決めていく。そのような「常識」に染まっている私が、なぜ文系においては学生の関心を持ったことが卒業論文のテーマとなり得るのかという疑問をもつのは当然のことである(私個人のせいではない！)。

このまま、驚きと疑問で終わっては本連載企画の意味はないことぐらいわかつている。この先を思考することが、「専門という門をくぐる」ことなのだから(第一回「学問との再契約」アステイオン九五号³⁾)。一つ思い浮かんだのは、得られる結論が「確固たる何か一つ」でなくともいいのではないかということ。例えば「学問」という言葉の定義が人によって「完全に」同じにならないように⁴⁾、ある研究テーマ(問い)から得られるその解答らは、人間の営みを言語化して残す重要性和ともに人類の知と

して存在し続けるのだ。調べたところ、社会学は「人間の共同生活に関する現象や社会の組織・構成上の特徴などを研究すること」（出典…小学館「日本国語大辞典」とある。テーマの幅広さに限界はないし、得られる結論は立場や時代が変われば変化するものであるかもしれない。ゆえに、「営み」としての研究に重点が置かれるのだろう。ただし、どのようなテーマであっても、まずは社会学としてまっとうな研究の手法（手続き）が踏まえられていることが大切である。もちろんこれは手法さえ正しければいいという過程第一主義ではない。あらゆる個人の視点や関心も研究テーマとして成り立つものであり、社会学の手法に沿って得られたその知見は万民のものとなる。櫻井は「社会学的手法を身につけたら生きていくうえで退屈しないよ」と学生に話しているとのことだが、その理由はここにあるとみた。個人の関心からの出発ではあるが、結果、個人を超えた結論に導く営みは、理系とは質の異なる懐の深さ、広大さを感じる。

そのような広さを感じさせる文系の研究に対し、理系の研究も自然現象を扱っているという点で幅は広い。し

かし一つ一つの研究テーマは（重箱の隅をつつとも揶揄される）個別的性格を有し、各研究者がある意味何かの一部となって研究総体として真実（とされる何か）に挑む。文系が個↓公なら、理系は公↓個なのかもしれない。この性質の違いこそが学生らのテーマ設定に見事に反映されていたのだった。

ただし、疑問も残る。個々人の興味関心に端を発するなら、逆に言うと、個々人の興味関心にならないものは研究対象にならないということだ。例えば、二〇二三年の現在において「戦争」という関心事を世界中の人々から奪うのは不可能であるように、社会学を学ぶに至るような人物の周りの出来事や見えている景色にテーマが偏ってしまっているのではないか。そういった意味でも、社会学では多視点、多視座、多角度といった多様性が特に重視されなければならないだろう。また、研究手法の一つである「比較」についての考え方も文系と理系で異なるように思う。データの比較、あるいは研究テーマの独自性を担保するための類例研究との比較は、理系では対照をきちんと取ることが求められる。一方、文系では

観察対象がユニークな存在であることが多く、対照が実質上成立しないこともあるのではないだろうか。あえて恐れずに述べるなら、何事にも共通点と相違点があると信じ（仮定し）、無理やりにでも境界条件をそろえて比較し知見を得ようとするのが理系。比較といいながら実質上の厳密な比較は半ばあきらめ、むしろ、個別の事象に対して主体的に興味を持つことで立ち現れる研究者個人の思想、それを試されるのが文系、とするのは言い過ぎだろうか。

さて訪問話に戻って、研究紹介には様々なことに驚きつつも、続いて研究室を巡りフィールドワーク用の機材などを見せていただいたとき、急に親近感を感じることとなった。フィールドワークでは対象とするものによっても異なるだろうが、必要な部材を使い、現場に出て、その場の状態観察やデータ収集などの調査を行う。装置や器具を使い、対象物から観察データや測定データを得るような実験を行う研究方法と非常に似通っている。今回訪問した文系三名の研究の中で、実は一番理系に近いのは櫻井の研究なのかなと感じた。

社会学を専門とする櫻井と機械工学を専門とする私が共同研究をしようとするとうなるだろうか。単純に研究テーマの選定に苦しみところから始まる未来が見えるのでここは無理矢理テーマを決めてしまおう。「おいしい〇〇を守る」という気候変動下で収穫が減っている特定の食品を守るために、その代替品を考えるとというもの。櫻井は食品の代替品となり得るものを徹底的に文献やインターネット、現地調査など様々な方法を駆使して調査し、さらに特定した代替品について、調理法の調査をしたり、さらに栽培・飼育される際の地理的特徴や歴史的経緯などを調べたりするのだろうか。一方、私の場合まずは代替品が特定されたところから始め、センサーなどを使って味・匂い・食感などの条件が元の食品とどの程度類似性があるのかを調べていく……こんな進め方が考えられる。あれ？　なんだ結局、文系、理系などと言いつけているが、研究ステージの違い“だけ”の話だったのかもしれない。

（安藤妙子・立命館大学理工学部教授）

*

分野の違いか、性格の違いか

「異なる分野の研究の門をくぐることで、自身の研究を見つめ直す」。今回の企画に参加した理由は、毎日を忙しく過ごす中で、ともすれば狭い研究の世界で視野狭窄に陥ってしまいがちな私にとって、今回の経験が新しい光となりうるのかどうか、自分自身を実験してみたかったからである。

文系研究室三拠点の最後の訪問先は、甲南大学法学部の三谷宗一郎准教授の研究室。私は同じ甲南大学に在籍しているが、三谷の研究内容を聞くのも文系学部の研究室に入るのも初めてだった。三谷の話を聞くために向かった会議室を開けると、これまでに三谷が集めた資料が山のように積まれていた。三谷の研究のメインは、現在の日本の医療制度が、戦後、どのような意思決定を経て作られたものかを探るものである。それゆえ、机の上に積まれた資料は、すでに公表されている政府文書だけでなく、いったいどこで手に入れたのか、厚生省（当時）

の非公表の内部文書や、当時の官僚の退任時の記念冊子もあった。さらに、文書ではないが、当時の関係者を訪問して、インタビューもおこなない、その音源も資料として大変重要であるとのことだった。三谷の研究分野では、なんといっても一次資料を収集するところが重要かつ難易度が非常に高い部分であるらしい。市場に出回らない資料に関しては、地道に足を使って、関係者の個人宅にあたるという。インタビューでは、もちろん正確に話す人物もいれば、昔のことなので思い違いがあったり、誇張しているかもしれない部分があったり、組織の中でよく思わない人物についてよくないように話す場面もあり得るとのことだった。それを前提として、なるべく客観性をもたせるよう、複数の関係者の話を総合し検討するという。また、関係者がインタビューを断る場合も当然あるということ、すでにお亡くなりになっている場合もあることも聞いた。

この三拠点目となる最後の文系研究室の訪問を終え、異なる世界にふれて感じた様々な違和感の大元がついに

わかった。それは、取得したデータや結論の再現性や客観性が不安定、ということである。

我々の分野では、生命現象の普遍的な原理原則を明らかにすることを目的としている。そのため、少なくとも私にとって、三谷のインタビューのような人の感想や思考が入り混じるゆらぎの多いデータから結論を下すことに不安が非常に付きまとう。情報の空白部分があるかもしれない、存在する情報も正しいと言い切れない部分もあり、条件もそろっていない資料で、結論を下すことに葛藤がないのだろうか。それが私には最後まで分からなかった。また、文系の研究者二名の話で共通していたのが、情報を蓄積していき、最終的に自らが納得できる結論をつけられれば良い、ということだった。生命現象の原理原則を明らかにすることを目的にしている我々にとっては、研究者個人の評価よりも、説得があるともいえるぐらいの多くの他人に受け入れられる結論を示さなければならぬ。そこにも大きな違いを感じた。

人間は自分の信じたいものを信じる。それを知っていても、おそらく無意識のうちに、自分にとって都合の良い

い解釈が頭の中に浮かんでくるものだと思う。それでは、我々の研究分野ではどうするかというと、それを排除すべく、複数回の試行を繰り返して偶然出た結果でないこと（再現性）を確かめたり、異なる角度の実験をおこなうことで同じ結論を導けるか試す、研究者が実験を仕込んだ後にそのサンプルの中身を知らない研究者が観察するダブルブラインドテストもおこなうことで、確からしさに確信をもつプロセスを入れることができる。研究計画の段階から、どのような条件のもとでおこなうか、どのようなことをしたら一回とカウントするのか、などの定められたルールを遵守することも基本である。もちろん、慎重に組んだ実験計画で、いわゆるきれいなデータが出たとしても、それは真実なのかは本当の意味では言えない。私は学生に、必ず自分の出したデータが正しいか、自分に都合の良い瞬間の数値をとってはいないか、先入観はないかという自問自答をすることが重要だと教えている。私が扱っている生きものは特に個体差などもある上に、行動観察をとまなう実験には観察者の都合の良い解釈が入ってしまう恐れが大きいからである。最も

信じられないのは、無意識に都合の良い解釈をする自身であり、どうしても知りたい真実を知るためには、それを前提とした証明プロセスが必要不可欠なのである。三谷の研究では、資料が残りにくい過去の出来事であること、多様な人間の営みの結果の事象を扱っていることを考慮すると、このような不確定要素の多いデータを扱わざるをえないことは納得している。だが、私はそれに、おそらく耐えられない。それでは、真実にたどり着ける気がしない。

今回の企画を通して、あらためて自分の研究について考えた。信じきることの難しい自分自身のために、自分が納得する方法で示したいことを示せることは、なんと幸運なことか。ただし、研究テーマの特性上、自分の知りたいことを明らかにするために三谷の方法がベストなのであれば、私もそうしているだろう。実際、我々の分野でも研究手法の限界はあるため、その場合は状況証拠から考察を述べることはしている。思えば、上で安藤妙子も述べているように、再現可能なのは限られた環境条

件下での実験、いうなら閉鎖系での話だ。対して、三谷のような研究テーマはいうなら開放系である。その違いはあれど、自分の知りたいことを、全力を尽くして知ろうとするのは、どの分野も共通している。知りたいことを知りたいと思う深い欲望、知れた時の快感、そしてその元となるデータを得た時の喜びは、どの分野でも普遍的なことは間違いない。

この企画の中で、理系として文系の研究をどのように攻めていくか、という話題になった。三谷の研究の誰にもできない点は、上記の通り、一次資料の収集である。自分の足を使って資料がありそうなところを当たりまくる、世代も仕事も異なる人物に根気強くコンタクトをとる、というのは、特に誰にも代わりがきかない。強いというならば、少しでも正確性をもたせるために、難しいとは思いますがインタビューは複数の研究者でおこない、そこで出た情報の真偽や印象をすりあわせることくらいだろうか。

話を聞いていくと、どうやら三谷は、ある政治家がど

の団体とつながりが深いかを調べるという別の研究テーマもおこなっているらしい。政治資金収支報告書から、その関係性を探るというのは、私にも予想できる手段であった。しかし、彼はそれにとどまらず、政治家が参加するようなパーティーの写真を個人ブログなどからあたり、そこに写っている顔ぶれからも関係性を判断するということをしているのだと言う。コロナ禍では写真に写っているほぼ全員がマスク姿であるが、それらの顔を判別するのは、なおさら難しいことである。そこで私がデータを簡便化するなら、すべてのSNSやブログの画像の顔認識システムを使って誰がいつどこで誰となにをしたかという情報を大量に自動で時系列と共に取得し、大規模ネットワーク解析をしようと思う。しかし、ブログを一つ一つ探っていくプロセスについて楽しそうに語っている三谷が印象的だった。このプロセスは、ブログに書かれているささいな言葉や写真の情報から、点と点をつないで線にして意味のある情報を組み立てる、いわば探偵のような醍醐味があり、研究の面白いところであるらしい。そのため、自動で一括化するのはいささか野暮な

のかもしれない。大量のデータを処理してそこから傾向を見出す研究が流行っている時代ではあるが、ちょっとした外れ値や、ずっと対象を観察していないと気がつかない小さなことというものは、一括化してしまうと可視化されずに取りこぼされる時もある。この点も、この企画を通してあらためて強く重要性を認識できたことであり、自分の研究でもこれを肝に銘じて、対象を丁寧に見ることを忘れないでおきたい。

(後藤彩子・甲南大学理工学部准教授)

*

ある分野と分野、ある専門と専門。それらの差異と一致を探ろうとする議論は、正直つまらない。そもそも違うのは当然だし、それらに共通項はあるに決まっているのだ。その物的で対処的な議論から奥へと進み、より何か意味のあるものを得られるかどうかは、自分自身を振り返る眼差しの有無に完全に依存する。例えば、ソクラテスが真なる対話に求めたものは、参画者らのコミットメントであった。その違和感は、その疑問は、その問いは、自分自身の存在に触れる事項であるかどうか、言う

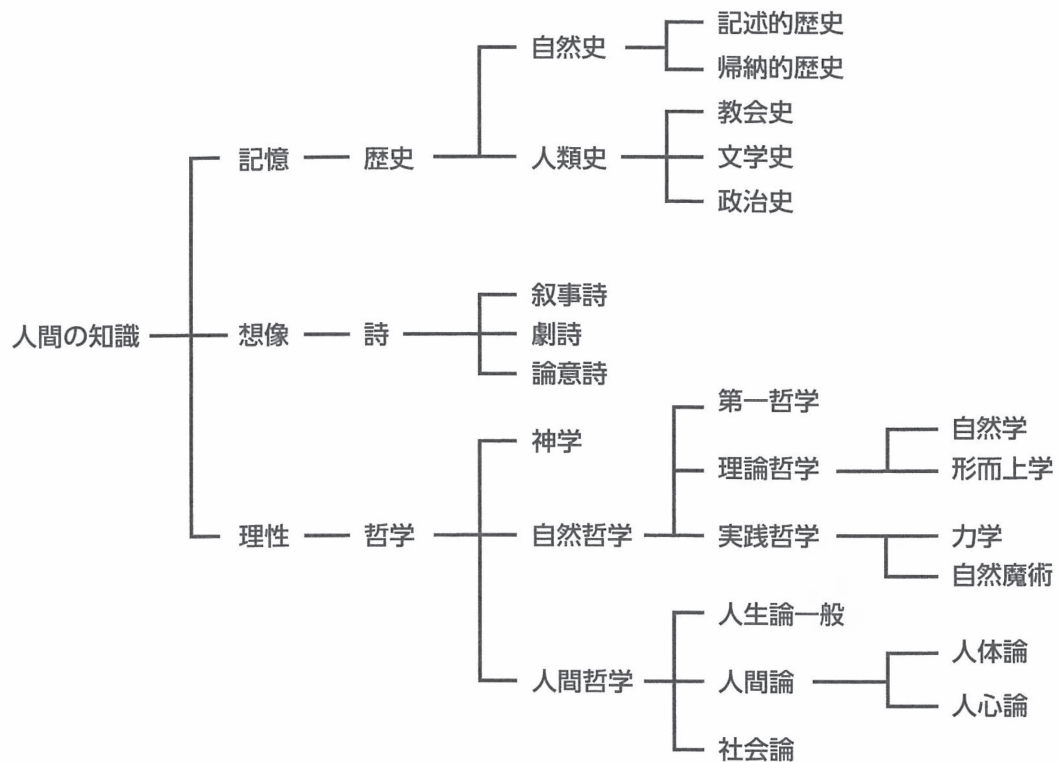
なら、自分が変わる用意があるかどうか、対話相手となる最低条件だったのだ。真理（知りたいこと）のもとでは皆平等であるというのはそういう意味合いである。そして、今回の三人もまた、真なる対話に相応しく、大いに自分の小部屋を自覚することとなっていたのは、読んでの通りである。

言い過ぎを承知でその営みを、内から沸き起こる関心や疑問をもとにした「創作」と、外の世界に存在する不思議の解明という「真実（の追求）」とに二分したとしても、発露となる研究者自身の「問い」の所在は、それらが自身の内にあるか外にあるかは、実のところ問題ではなく、その内と外の相互循環性こそが本質なのであろう。創作とて、個々人の想いの表現でしかなく、それが普遍かどうかはどのような研究的手続きをどれだけ踏まえていようが結局は人類（または歴史か）の判断に依存するものだし、真実とて、T・クーンよろしく、単にその時代における比較的大多数の研究者が「そうとしている」ことの以上でも以下でもない。「そうではあるが、それでもなお、こう主張するほかない」、ないしは、「それを

踏まえてもなお、こう考えるのだ」という覚悟にも似た構えが必須なのであろう、何か物を申すということは。いうなら、自己と世界への懷疑を通過する一周をまわつてからの「創作」であり「真実」でなければいけないのだ。そう、その一周をまわらなければ、それは研究であつても学問ではない。

口惜しいが、制度面だけでなく学問の思想を語るにおいても、理系・文系という区分はやはりどこかしら使い勝手がいいことは認めざるを得ない。むろん、現状の学術界がそれを前提とした社会構造を構築していることが原因ではあるが、それゆえに本企画の挑戦は、無駄に終わるのだろうか……ないといいつつある、あるといいつつない、専門分野間の壁。それを破砕するのではなく、壁を辿つてそれが途切れるところまで行くには、もつともつと歩かないといけないのだろうか。そのためにはまだまだ思想的熟度が必要か。あるいはもつと強烈な体験か。この企画で学術界を変える！などと大風呂敷を広げる気は毛頭ないが、せめて、執筆者らと読者には自身の研究姿勢を変えうるぐらいの響きはあつてもいい。それ

図1 学問の分類



参考：ディドロ、ダランベール編『百科全書—序論および代表項目—』桑原武夫訳編、岩波書店、1971年、364-365頁

ぐらい本気で挑んでいる本連載の最終回である次回（第四回）をむかえるにあたり、第一回から今回の第三回までを含めてぜひともこちらのフォームへご感想やご意見を頂戴したい。

<https://forms.office.com/r/02n9EjPLjg>



〔付記〕

後日、訪問記レポートをWEBアステーションで公開予定。

〔注〕（1）学問の分類方法について、古代の代表はアリストテレス

のそれとして問題ないだろう。彼は学問を三つに大別し、理論的（形而上学、数学、自然科学等）、実践的（政治学、倫理学、経済学等）、制作的（詩学、医学、建築術）とした。次に紹介するのは、中世における、かの「自由七科」。あまりに有名なので説明は省く。近代において、宮野が個

人的に好きなのはベーコンのそれである。ルネッサンス
よろしく、自由七科では薄まったアリストテレス感が復
活し、あるときは対象で分けていたり、突然、手法で分
けていたり、有機的な感覚の漂いがいい(当時は批判も
多かったようだ)。

その後、科学の進展とともにいつそう様々な分類がなさ
れ、現代に至っては、そこに応用研究の部類も加わり、
複雑さを増している。

- (2) 「解く理系に問う文系(連載企画 第二回: 超えるのでは
なく辿る、二つの文化)」、アステイオン九七号(二〇二
二年一月)一九六―二二頁。 <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/277452>

- (3) 「学問との再契約(連載企画 第一回: 超えるのではなく辿
る、二つの文化)」、アステイオン九五号(二〇二一年一
月)二二四―二三〇頁。 <https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/268242>

- (4) Stanford Encyclopedia of Philosophy の Definitions (<https://plato.stanford.edu/entries/definitions/>)によると、辞書的定
義、規約的定義、記述的定義、解明的定義、直示的定義
がある。この「学問とは?」という問いに対して、当然な
がら辞書のまたは規約的定義において「...とは...である」
と一義的に述べることもできるが、文中では、記述的定
義として「あなたが考える学問とは?」という解答記述が
多様である、ということ述べている。

安藤妙子 (立命館大学理工学部機械工学科教授)

Taeko Ando

名古屋大学工学部航空学科卒業。同大学院工学研究科マイクロシステム工学専攻博士前期課程、博士後期課程修了。博士(工学)。日本学術振興会特別研究員、名古屋大学大学院工学研究科講師、立命館大学理工学部准教授などを経て、2021年より現職。マイクロマシンやMEMS (Micro Electro Mechanical Systems)を開発する上で必要な、材料評価や製作方法の開発などの基盤研究を行う。

後藤彩子 (甲南大学理工学部生物学科准教授)

Ayako Gotoh

東京都立大学理学部生物学科卒業。東京大学理学系研究科生物科学専攻修了。愛媛大学大学院連合農学研究科博士課程修了。博士(農学)。自然科学研究機構基礎生物学研究所特別協力研究員、同生理学研究科専門研究職員、日本学術振興会特別研究員(琉球大学)、甲南大学講師を経て、2019年から現職。アリの生態を探る研究をしている。サントリー生命科学財団「サントリーSunRISE」採択者。

櫻井悟史 (滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科准教授)

Satoshi Sakurai

1982年生まれ。立命館大学文学部卒業。同大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程修了。立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員、サントリー文化財団鳥井フェローを経て、現職。専門は、犯罪社会学、文化社会学、歴史社会学。主な研究テーマは、日本の死刑とキャバレー。単著に『死刑執行人の日本史——歴史社会学からの接近』(青弓社)がある。

プラダン・ゴウランガ・チャラン (龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員)

Gouranga Charan Pradhan

1978年インド生まれ。2013年インド・デリー大学東アジア研究科修士課程修了。2019年総合研究大学院大学国際日本文化研究専攻博士課程修了。博士(学術)。2017~2018年サントリー文化財団サントリーフェロー。専門は日本文学・比較文学・日本研究で、日本の古典文学の国際的な流通と受容をはじめ、翻訳論・世界文学論に関する研究を行う。近刊に『世界文学としての方丈記』(法蔵館、2022年)がある。

三谷宗一郎 (甲南大学法学部准教授)

Soichiro Mitani

1989年生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。同大学院政策・メディア研究科後期博士課程単位取得退学。博士(政策・メディア)。サントリー文化財団鳥井フェロー、医療経済研究機構研究員などを経て、2021年から現職。専門は行政学、政策過程論。主な著作に「医療保険政策をめぐるアイディアの継承と変容」『年報政治学』2016(2)、「時限法の実証分析」『年報政治学』2020(1)などがある。

村田純 (サントリー生命科学財団生物有機科学研究所主席研究員)

Jun Murata

1996年京都大学農学部卒業、2002年奈良先端大バイオサイエンス研究科博士後期課程修了。NEDOフェロー、カナダBrock大学博士研究員、奈良県中小企業支援センター博士研究員を経て、現職。専門は植物生化学、植物特化代謝、根圏環境生物学。植物の低分子化合物がどのような生理機能を持ち、どう作られているかを明らかにしていきたい。

宮野公樹 (京都大学学際融合教育研究推進センター准教授)

Naoki Miyano

1973年生まれ。立命館大学理工学部卒業。同大学院博士後期課程修了。カナダMcMaster大学、立命館大学、九州大学を経て、現職。専門は大学論、学問論。京都大学総長学事補佐、文部科学省学術調査官の業務経験ももつ。一般社団法人STEAM Association代表理事。近著に『問いの立て方』(ちくま新書)、『世界が広がる学問図鑑』(Gakken)の監修も。